**予備がなく行き詰る 2017 11 12**

**マタイ 25:1-13 スティンストラ牧師**

私の家族の誰かに私にどんな奇癖があるか聞いてみるなら、最初に出てくる答えは私が使っている日用品の予備をいつも十分蓄えているいることだろう。私は普段使っているものが突然なくなり予備もないという状況に陥るのがとてもいやだ。だから、私のクローゼットの棚を見るなら、いつでも歯磨き粉とかみそりの刃とコンタクトレンズのソリューションを余分に蓄えている。ボディーウォッシュやシャンプー、デオドラントなどを一本だけ予備を持つなどということはとても危険であり、だれかがきてその一本を「借りる」かもしれない。つまり、私が夜によく眠ることができるようにするには、予備のための予備を用意しておく必要があり、だから余分に蓄えるようにしている。

もしも食料を入れておく棚に予備のマヨネーズがなくなって、さらに冷蔵庫にあるマヨネーズが三分の二は無くなってしまっていたとしたなら、それはわたしたちにとって大変な危機だ。くつしたに穴があくなら、モールへ買いに走る必要などはなく危機管理の為に、いつもタンスの引き出しに予備の靴下が入っている。突然の来客があったときでも私があわてないのは、いつも上等な赤ワインと白ワインを12本づつ用意しているからだ。日曜の朝急いで家を出て牧師用のシャツにつける白いカラーを忘れてきてしまっても、事務所の引き出しに一つか二つのカラーを隠し持っているからだいじょうぶだ。

予備を持つことは私の人生にとって不可欠だ。だから私は今朝の福音書に記されているイエスのたとえ話に出てくる婚宴の出席者であったなら、私のランプのためにたくさんの余分な油を持ってきたと思う。結局のところ私は牧師として長年に渡って痛ましい教訓を受けてきた。結婚式を遅れてはじめなければならないような事態を事前に予測することはできないが、私が予定通りの時刻にぴったり始まった結婚式を一度も体験したことがないことを聞いても、おそらくみなさんはびっくりしないのではないだろうか。そもそもイベントは、スケジュールどおりに進まないものなのだ。

今日では事故によりフリーウェイは閉鎖され、結婚式への到着を遅らせることは頻繁におこる。だが私はその他の許しがたい理由のために待つことを余儀なくされた経験がいろいろとある。 例えば、リムジンの運転手が新郎の家族を喜ばせようとしてオレンジカウンティの景色のよい場所をひとめ見せる決心をしてしまったこと、またある時はベストマンがクローゼットにぶら下がったままのタキシードのズボンを取りにウィティアのアパートまで運転して戻らなければならなくなったこと、またある花嫁は複雑にアレンジされた彼女のヘアスタイルが急に気に入らなくなり、教会に到着したとたんに自分の髪を洗ってしまったこと。

これらの私の体験した結婚式時刻に遅れてしまう話とは異なり、今朝のたとえ話にでてきた若い女性たちは天の御国から来る花婿は周辺の人々への世話をよくする方であり、予想もできない程に遅れてくることをわかっているべきだった。罪人たちといっしょに食事をしたり、異邦人たちと会話をしたり、視力を失った人を見えるようにしてあげたり、悪霊におかされた人々に平安を取り戻してあげたりするような御方であることがわかっていたなら、結婚式のスケジュールは大きく遅れてしまい、たいへんな待ち時間になってしまうことは当然予測するべきことだった。弟らラザロが重篤で姉たちからはすぐに来て欲しいと願望されたのに予定がくるい、自分にとっても大切な友人ラザロが死亡してからやって来たようなイエスであったことを忘れてはならない。

おとめたちはもっとよく知っていたはずだ。メニューとゲストリスト見ること以外におとめたちがすることは待つこととならんで、新郎の不幸な寄り道をしてしまう癖は最初の会話の話題の1つでなければならなかった。彼女たちは花婿の遅い到着にあらかじめ予測して、油の予備を買ってきて余分を蓄えているべきだったと考えるのは私だけではなかったと思う。結婚式の準備をするということは、単に花婿の到着の遅れに備えるだけではなく、そのほかにも遅れがでないかについて前もって準備するのが賢いというものだ。油がなくなってランプはぱちぱちと鳴り出し、名誉あるゲストが足元を照らすランプが使えなくなるような状況にはだれも陥りたくはない。

しかしタイミング悪く油が切れてしまうことよりもっとまずいことは、ランプが十分燃えている状態を保つために十分な油を蓄えていることこそ人生で最も重要なことであるという誤った仮説を信じてしまうことかもしれない。そのような仮説を信じるともっと予備の油を蓄えようとして夜中に油を買いに走ろうと決心してしまい、その不幸な決心は本来の役割を演じるときにその重要な場面にいられなくなってしまうことにもなる。すなわち花婿がまさに来てあなたに会える状態になったときに、あなたは花婿から離れている。そしてあなたがついにもどって来たときには、披露宴へのドアを明けて入ることはもうできないのだ。

私たちがこのたとえ話から学んでいることは、私が予備を大切にするのと同じ位に、救い主の再臨を喜び祝うことこそ大切でありとても意味があるということだ。私たちは婚宴に出席するように招かれたことを忘れないように強いられている。忘れず覚えていれば、私たちが救い主である花婿といっしょにいる喜びを体験できるのだが、またその救い主は私たち以外にも他の多くの人が花婿との婚宴で彼に会えるように招こうと働いていることも忘れてはならない。　私たちは自分がいったいどの位の油を蓄えることが賢いことになるか意味のない憶測にとらわれたり、いったいいつになったら救い主現れるかについて一生懸命に推測したりしてはならず、また待ちくたびれて眠ってしまわないようにもしなければならない。私たちが心にとめておくべきことは、イエスのしばしば信じられないくらいの気前の良さが婚礼へ大幅な遅刻をもたらすことと、その遅れをもたらすすばらしい理由だ。主は従うものをもっと増やそうとして、いつもスケジュール通りには行動できなくなってしまうのだ。彼はいつも輪をひろげようとしており、婚宴に加わる人々のリストを増やそうとしている。なぜなら主は次のようなことが人生の鍵であることをご存知だからだ。その鍵とは決して余分なまでの予備を棚にとっておくことではなく、世界中で不可欠な物質をこれだけあれば安全と思われる量を備蓄することでもなく、むしろ神の永遠の饗宴に一人でも多く参加できるようになることがもっと意味のあるということに、驚きをもって気づくようになることである。アーメン